

私たちが小学生の頃 投稿



● 経堂国民学校 昭和の思い出

5 期 津崎 経世（世田ヶ谷）

昭和の初め、経堂の町は大山街道の澁谷と甲州街道の仙川を結ぶ往還と小田急線が交差する駅を中心に、南北に展開する小さな商店街を挟んだ新興住宅地として発展してきた。丘陵の東西には烏山川と北澤川が流れてのどかな稲田が広がり、未開発の雑木林が点在するなかには小さな牧場などもあり、武蔵野の面影が色濃く残った土地であった。麦畑を開発して都心に通う勤労者向けの分譲住宅や借家ができ人口も増加した。

昭和 16 年 1 月に経堂尋常小学校が、近隣の桜小学校などから 5 年から 2 年生まで 400 余名の転校生を迎えて創立された。

その頃は、冬には空っ風が吹きすさび、畳がざらざらするほど赤土が家に吹き込み「世田谷満洲」などと悪口をいわれた。だが春になると今の「赤堤通団地」のあるあたり一面の田圃には蓮華の花の赤じゅうたんが広がり、初夏には稲田に水を引くため北澤川(40 年代に下水道の暗渠となりその上は緑道となっている)に堰が築かれると小鮒や泥鰌が面白いように釣れ、まさに「小鮒釣りしかの川」であった。子供たちは、空地の原っぱで時局柄戦争ごっこや「ちゃんばら(剣劇)」に興じ、横丁ではビー玉にベーゴマ、めんこや独楽回しに夢中。

夏には、明けがたに早起きして、秘密の櫟木に群がるかぶと虫やクワガタ取り、放課後は蝉時雨の中で蝉取り・・・にいい蝉に油蝉、ひぐらしや法師蝉は手づかみで、蜻蛉釣りでは塩からや麦わら、赤とんぼは取り放題、銀ヤンマや鬼ヤンマを捕まえるにはやや技術が要った。・・・と子供たちは一日中忙しかった。夜になると下の田圃から蛙の大合唱が窓を通して家のなかでも聞かれた。

しかし時あたかも満洲建国や支那事変(日中戦争)の泥沼化などにより欧米との関係も悪化し、戦時体制へと移行するなかで軍国主義教育への学制改革がおこなわれ、同年 4 月 1 日から尋常小学校は国民学校へと改制された。

その時「国民学校一年生」として入学したのが、我々が 5 期なのである。同期は 3 組 150 名ほどと記憶している。教科書は永年親まれた小学読本「サイタ サイタ サクラガ サイタ」から一転してヨミカタ「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」に代わり、皇国少国民の錬成のための軍国主義的教育を受けることとなった。教科の「修身」が強化され、2 月 11 日の紀元節など四大節の朝礼では校長が「教育勅語」を奉読し、学童は頭を垂れ涙をすすりながら拝聴した。神武以降 124 代にわたる天皇の名と教育勅語は全文暗誦するよう強要された。

そしてその年 12 月 8 日真珠湾攻撃により我が国は大東亜戦争(第 2 次世界大戦)に突入することとなる。翌 17 年シンガポール占領など初戦は連戦連勝で、戦勝記念として児童にもゴムボールが配布されるなど国民は戦勝気分は大いに沸いたが、それは 4 月の米機 B25 による本土初空襲で水をさされた(校庭からはるかに敵機の機影が望まれたのを覚えている)。戦線は東南アジアから南洋諸島へと拡大し、その 6 月ミッドウェー海戦に大敗したのを機に戦局は連敗状況に一転、18 年にはガダルカナル島敗退、アッツ島玉砕と敗戦が続くが、大本営

はガダルカナルについては「転進」などと敗戦を糊塗し、東条内閣は挙国一致の臨戦態勢を一層強化した。

「教育勅語」の忠孝尊重の精神を拝し、一億一心、一旦緩急あればお国(天皇)のために身命を捧げるのは国民の務めとされた。「贅沢は敵だ!」「欲しがりません。勝つまでは」のスローガンが街にあふれ、一億総武装の掛け声のもと、高学年には体操の時間に手旗信号や藁人形を竹槍で突く実戦練習が課された。

隣組が結成され防空練習が全員参加で行われ、不参加者は非国民と罵られた。また毎朝横丁ごとに児童全員が整列し、行進して天祖神社に武運長久を参拝してから登校し、正門わきの奉安殿(昭和天皇皇后のご真影が飾られてある)に敬礼した後に朝礼が行われるのが日課となった。食糧不足が激しくなって給食は黒パン 1 個となり、藁くずのような混じり物が目立つようになった。

19 年 6 月連合艦隊がマリアナ沖海戦で壊滅、サイパン島玉砕と戦局は急激に悪化、東条内閣は瓦解した。この頃より我が国は制空権を失い、B29 による本土空襲が激しくなり、毎日のように灯火管制のもと警戒警報や空襲警報が連発され、暗闇のなか父親が庭に作った防空壕に転がり込むような生活が続いた。

8 月には学童集団疎開が開始、縁故で疎開できる者以外の全員が先生と共に新潟県塩沢に疎開することとなり、学校は実質閉校となった。疎開先では食料不足で、茶わんの底にわずかに盛られた飯粒を一つ一つ数えながら食べるような日々が続き、全員が栄養不足に陥った。腹が減って堪らずトンボを捉えてその肉を食ったとか、いやそれは良い方で、トンボを捉える元気も出なかったなどという思い出話がある。

20 年 3 月の東京大空襲による江東全滅、5 月連合軍による沖縄の占領、8 月の広島、長崎の原爆投下およびソ連の参戦を経て、8 月 15 日のポツダム宣言受諾と終戦の詔勅により敗戦が決定された。

その詔勅を縁故疎開先のラジオで聞いたとき、ああ戦争が終わったという感慨と、これで東京に帰れるという喜びを同時に感じた。その日のやけに暑く明るかった夏の日差しとその夜の電気の浩々たる明かり。灯火管制で過ごした命がけの暗い夜から解放された平和の有難さをしみじみ感じたのを思い出す。

母親が大変苦勞して手に入れた東京行きの切符を手にして帰京できたのは 9 月 30 日だった。東京駅は瓦礫の山で、新宿まで焼け野原が続いたが、幸い経堂は戦災を免れ、我が家も無事だったが、家から数 100 メートル下の田圃に、千歳台にあった高射砲陣地により撃墜された B29 の主翼と胴体の残骸が無残に転がっていたのには驚いた。

終戦で疎開者や復員者が一斉に帰京したので東京の受け入れ態勢がパンクし、10 月からロックアウトが実施され、入京が一斉に禁止された。集団疎開のみんなが帰京できたのは 1 か月以上あとになってからだった。

21 年正月神格否定詔書により天皇が神から人になり、占領軍の GHQ が新しい神となった。世は一転して文化国家・平和国家建設が叫ばれ、子供たちは新しい理想を目指すよう強く指導された。学校では教科書のある箇所を墨で塗りつぶすよう先生から指示されたが、それは

つい先程まで重要で暗記すべきものと同じ先生から厳しく指示されていた箇所だった。権威に対する不信感、自立した精神は自ずから養われものだといえる。

成人男子の大半が戦争に駆り出され、銃後には女子供と年寄りばかりになって農業・工業共に著しく生産力が落ちたところに、復員や疎開帰りの人々が廃墟となった都市部に殺到したため、食料不足は著しく、電力も不足して毎晩のように停電が多発して、戦時中と同じ暗い夜が続いた。

都会の主婦たちは、食料を求めて近隣の農家に「買い出し」に通った。買い出しといっても現金は通用せず、衣料などと芋やカボチャの物々交換であった。運が悪いと警察の一斉手入れによりすべて没収された。民衆の不満がつつのり5月には宮城前広場で米よこせの大規模な食糧メーデーがあり25万人の労働者が集結した。法を守り配給のみで生活を貫いたある裁判官が餓死する事件もあった。

何もない中で子供たちは横丁ではキャッチボール、原っぱでは草野球に興じた。ボールやグローブは母親が手製の布製が多かった。それでも楽しかった。授業の内容もGHQの指示で「修身」は廃止、代わりに民主教育を目指す「公民」が加わり、父兄も学校に参加するPTAが始まった。そして21年秋には新憲法が公布され、名実ともに民主国家日本がスタートすることとなる。

我々は昭和22年3月に国民学校を卒業するが、その翌4月から新しい民主教育に相応しい6・3・3・4制がスタートし、国民学校は廃止、新しい小学校がスタートすることとなる。つまり1年生から6年生まで国民学校を全うしたのは、我々昭和9年生まれが中心の5期生のみであるといえる。

まことに波乱万丈の学校生活であったが、今思い返すと懐かしさがこみあげてくる。まさに戦争と戦後の混乱のなかで、いわば生死を共にした幼馴染の戦友という感覚が同期には強いのである。

後 記

新制中学では設備が間に合わず、女子は松澤中学校へ、男子は祖師谷小や塚戸小の卒業生と一緒に粕谷にできた新制「平和中学校」(現在の千歳中学校)に入学した。毎日3キロ半の道のりを往復徒歩通学することとなり、物資不足のため自転車が買えたのは3年生の夏ごろになってからであったので、おかげさまで体だけは丈夫になった。

教科書は新学期に間に合わず、予定された校舎は復員家族の寮の引っ越しが済むまではと、向かいの「千歳高校」の教室を借りて一部は青空教室という有様であった。1年足らずで家族寮を急改造した校舎には入れたが、校庭は麦畑の畝の跡がデコボコで野球もろくにできず、体操の時間は畝ならしの土木作業で忙殺される始末。先生も資格の有無に関係なく、大学浪人や復員者も混じる混成部隊であった。

無い無い尽くしの六・三制のなかで何とか学校の体制を維持できたのはPTAの渾身の努力のおかげといって過言ではないといえる。さらにこのあと我々は新制高校・新制大学と、熾烈な受験戦争の渦中に放り込まれることとなる。